

NZ・フェザーストン事件の遺骨問題について

佐藤 幸子

(1)

第二次世界大戦中ニュージーランドで捕虜になった日本兵がNZ兵と衝突して多数死亡したが、その後の処理について、いまだ未解決な部分がある。

ソロモン諸島の海戦で捕虜になった日本兵がニュージーランドのフェザーストン（北島、人口約2500人）に（アメリカから依頼されて）収容された時、護衛のニュージーランド兵と衝突して、日本兵48名、ニュージーランド兵1名が死亡した。しかしその遺体の処分などについては多くの人々の調査にも拘らずいまだに明確なことは不明である。筆者がこの事件について調査を重ねてきた中でいろいろな人に出会い、様々の出来事があった。しかし遺骨については相変らず不明のままであるが、このたび次の段階をめざしてそれらについてまとめておきたい。

1989年カンタベリー大学（NZ）に留学した時、McNaughton教授がこの事件をモデルとして書いた脚本“SHURIKEN”（ビクトリア大学教授 Vincent O’Sullivan 著）を取り上げた。捕虜800人の内200名が座り込み60人のNZ兵士と睨み合った。威嚇射撃が一人の日本兵に当たり即死、騒然となって立ち上がった日本兵に斉射撃があり、一瞬の間に日本兵48名、ニュージーランド兵1名が死亡した。ここまではよくある話だが、問題はその日本兵の遺骨がいまだに行方不明であることだ。これまで沢山の人が血眼になって調べているにもかかわらずまだ判明していない。そもそもこの事件自体がいまだにごく一部の人々の間でしか知られていない。近年に至ってやっと学会で発表されるようになり、新聞にも載るようになったが、まだ全国的なレベルで知られるには至っていない。昨年（99年）厚生省と赤十字に問い合わせたところ全く知らないと言うので、筆者の書いた記事（97.5.27付 北海道新聞）をファックスで送ったところ、「こうして新聞に載っているんですから本当なんでしょうな」と呑気なことを言っている。そして遺骨に関する情報をもらうつもりであった筆者に、逆に「情報を教えて下さい」と言われ、なんともおかしな話であった。

筆者がカンタベリー大学で研究のため昭和天皇が亡くなった日（1989.1.7）に日本を発ちニュージーランド（クライストチャーチ）に到着した夜、東京のニュージーランド大使館に天皇の太平洋戦争の責任を問う過激分子がいやがらせの電話をかけてきて警官が大使館の回りを警護している様子がホテルのテレビに映った。McNaughton教授が大学で“SHURIKEN”をテキストに取り上げたのはそれから間もなくのことであった。教授は当時の捕虜の写真からスライドを作成して見せてくれた時にはよく写真が手に入ったものと驚いたが、後にそれらはフェザーストンの戦争博物館にあることを知った。それからほどなくして（6月）クライストチャーチの名門高校 Christ’s College の高校生達がこのドラマを上演したことは感慨深いものがあった。観客の中でただ一人の日本人であった私からは入場料を取ろうとしなかった。舞台装置、メイキャップ、演技などとても高校生とは思えない素晴らしい出来栄であった。美しい「さくら」の曲が劇の進行中繰り返し流れていた。これに比して1983年初めてウェリントンの Hannah Playhouse (Downstage Theatre プロダクションによる演出) で上演された時のテープを McNaughton 教授

が聞かせてくれたが、それはまるで太棹の三味線による浄瑠璃のような音楽であった。

ドラマの最後に「夏草やつわものどもが夢の跡」の芭蕉の句に仰天した私は冬休み（8月）になるやフェザーストンにとんで行ったが、この時はこれがフェザーストンと私との長い縁の始まりとは夢にも思わなかった。その内事件の関係者や書籍の存在も少しづつ分ってきた。なにより驚いたことは一番のリーダーである安達元海軍少尉が呉市に生きていることであった。日本英文学会九州支部大会の帰り（91年）、広島でお会いすることが出来た。私は女一人で着物を着ていて容易に見付けることが出来るにもかかわらず、旗（当然のことながら日の丸）を掲げてホームに出迎えてくれたのには参った。近くのレストランで次の汽車までいろいろな話を伺った。毅然としたまさに軍人の鑑のような立派な方であった。弾が彼の肩を貫き彼は気を失って倒れた。その時彼の頭をよぎったことは「あーこれで自分も死ぬことが出来る。死んでいった戦友たちに申し分けが立つ」ということであったという。嬉しかったそうだ。従って生き返ったことはまことに残念なことであったと彼は語った。

ここの捕虜の一人であり、このキャンプでキリスト教に出会い、帰国後アメリカの聖書学院に留学して牧師になった新屋徳治氏はその著書（『死の海より説教壇へ』聖文社、1988）において不名誉な捕虜になった苦しみを克明に綴っている。彼にとってNZがどんなに深い意味を持った国であるか察してあまりあるものがある。ひどい土砂降りの日私は横浜の氏のお宅に会いに行き、奥様が駅まで出迎えに来てくれた（1992.5.30）。氏は引退したらNZに来るよう友人たちが勧めてくれているので、老後はNZで過ごしそこで死にたいと言われていると言われた。

やはり捕虜であった桜井甚作氏（北海道新聞の記者である桜井氏の父上）はこの時の経験を『地獄からの生還』（豆の木工房 1993年）という著書にまとめた（余談ながら、この事件のことで手紙や電話をしている内に彼の得意の篆刻で私の印鑑を作ってくれ書道の時に重宝している）。

その内北海道にも彼等の仲間がいることを知った（稚内、室蘭、旭川、中湧別など）。それはまさに驚きであった。早速、中湧別の水野護氏に会いにチューリップで有名なその町を訪れた（98年）。まことに好人物そのものご夫妻で暖かく私を迎えてくれた。この町のチューリップの見事さはNHKの朝の放送で全国に紹介されたほどで、「見事」と言う言葉では表現出来ないほどのものであった。2世帯住宅で子供や孫と一緒にまるでホームドラマのように幸せに暮らしていたが、ガダルカナルの戦いで負傷して身体障害者となり、立ったり座ったりが不自由でその度まるでアクロバットのような姿勢をとらなければならなかった。しかし、戦死したと思われ墓も作られてあったそうで、彼は自分を十分に幸せな人間と考えていた（その村では5人が戦死したとして墓が作られたが、その内戻って来たのは彼一人であった。）ガダルカナル海戦で負傷してウエリントンの病院に入れられ、そのあとフェザーストンに移され療養したが、「親も及ばない親切な看病を受けた」とのこと。監視の兵士は夜中におまるの始末など嫌な顔一つせずしてくれたそうだ。まだ若かった彼は夕方になると親が恋しくなるそうで、その様子をみた看護婦は窓を開けて空の月を指差して慰めるのであった。多分日本の彼の故郷でも父母が同じ月を見ているだろうということを教えて彼を慰めたのであろう。暴動が起きて50人近い遺体を前に形ばかりのお通夜をしたが、翌朝起きてみると一体も無くなっていたそうだ。この話を聞いた時、遺骨が見付からない内は「死んでも死にきれません」との彼の言葉を私はやっと本当に理解することができた。この類の言葉は普通世間でよく使われるし、この事件の関係者もたびたび使うのを聞いてきたが、その本当の意味をこの時はじめて私は知ったのだ。目の前に山と積まれた遺体が一夜の内に忽然と消えてしまっただけで、納得出来ないのはあまりにも当然の話だ。しかもこのことを経験した人は

私が会った人達の中では水野氏だけなのだ。安達、桜井氏は重傷で病院のベットの上である。新屋氏は別の棟に収容されていて直接この事件に係わっていない。この時から私はいよいよこの遺骨問題を打ち捨てておくわけにいかなくなったのだ。

この事件はニュージーランドでも次第に知られるようになり、浦和市の姉妹都市ハミルトン市が丁度市制 50 周年を迎えた 1995 年、ニュージーランドと日本の共同制作（プロダクション UPS プロデューサー ロイス リビングストーン-ハミルトン、奈良橋陽子-東京）により“SHURIKEN”を、ハミルトン（11 月）、東京（12 月 5 日～10 日）、浦和（同月 20～21 日）で上演した。客席から俳優が飛び出してくるなど、なかなかダイナミックな演出であった。見る人が見れば、あーあの人は誰々さんだというようにモデルが分かるそうだ。東京で私が観劇した日は幸運にも安達、新屋、桜井氏らが出席していて、最後に彼等は舞台上に上がって挨拶した。さらにウイバーズ・ニュージーランド大使もいらしていて、ニュージーランドのテレビ局も撮影に来ていた。しかし安達氏にここに来て頂くまでには大変な苦労があったのだ。それまで“SHURIKEN”は翻訳されていなかった。その原作の英語の難しいことは英文学史上難解をもって知られる James Joyce (1882-1941) の“Ulysses” (1922) もかなわないほどのものだ。難しいという意味は卑語、俗語、しかもそれは兵隊用語なのだ。最低の英語と言ってよいかもしれない。辞書にも載っていないので、私は二人のニュージーランド人（小樽市英語助手マッキーニ先生、クライストチャーチポリテクニクのイーリー先生）の家庭教師（？）に師事しなければならなかった。それがやっと梅光女学院大学の江澤即心教授の翻訳により出版された（『手裏剣』エーアンドエー株式会社 1995）。それを読んだ安達氏の驚きは大きかった。彼は良かった。NZ 兵はこんなに悪くはない。日本人にたいしてこんな意地悪はしなかった。自分は常に敬意をもって接してもらった。一度たりとも失礼な扱いを受けたことはない。常に紳士として遇して頂いた（安達氏の品格のある風貌、態度に接しては NZ 人もごく自然に尊敬の気持を持たずにはいられなかったろう。私が彼に初めてお会いした時も彼は NZ 人に対する感謝の気持を語っていた）。こんな芝居を見るために上京などしない。彼は頑として首を縦に振らなかった。慌てた UPS のメンバーはぞろぞろ 5、6 人も呉市に飛んで行って彼を説得した。どんな話し合いがなされたかまでは聞かなかったが、やっと安達氏は機嫌をなおして上京して舞台挨拶までした。私は彼がどんな挨拶をするか大いに興味があったが、そこはさすが大人でほどほど無難な挨拶をこなした。休憩時には主役の安達氏の役を演じた俳優矢田政伸氏（きりっとした清潔感に溢れたそれは素敵な青年であった）を筆頭に沢山の人が安達氏を取り囲んで話しかけたり質問をしたり、大変なもてもて振りであった。その夜安達氏、新屋夫妻、そして私は食事を共にした。

ウエリントンの日本大使館に長く勤めた Akiko Omundsen さん（終戦の時「沖縄県民かく戦えり」との言葉を残して自決したかの有名な大田中将のご息女）は徹底的に調べたが、結局遺骨のありかを突き止めることは出来なかった。彼女とは何度も会って沢山の話を聞き、彼女の持っているかなりの資料をコピーさせて頂いた。彼女はウエリントンの火葬場まで行って調べたが、今の主人は 2、3 代目位でそんな話を聞いたような気がするが、よく分からないとのこと。ただ海上自衛隊の練習艦がウエリントンに入港した時、「海ゆかば」と共に花輪を捧げたりもしている。そのお世話も昭子さん（NZ では普通ファーストネームを使う）がすべてしてきた。例えば、500 人の自衛官が参加するとバスを 10 台手配しなければならないのだ。5 年ほど前に筆者が訪れた時には、彼等が捧げた花輪が雨に濡れて色褪せてはいたが、まだそこにあった。なんと気の利いたことをするのだろう、一体どなたがこんなことを思い付いたのだろうと聞いていたが、後にそれ

は JANTA (日本オーストラリアニュージーランド教師連盟) の夏期合宿 (94 年 7 月) に双方講師として参加した時、お会した小山田隆元 NZ 大使であったということをご本人から直接伺うことになる。氏は少し前に札幌の S 大学での集中講義のため来札の折よく小樽にもいらしたとのこと)

ところがそれから暫くして海上自衛隊が入港した時、ウエリントンの町の中心でブラスバンドなどで華やかなパフォーマンスをしているビデオを入手したが、そこまでいくと国家間の正式な行事になってしまう。まだこの問題は日本国とニュージーランド国との間で正式な協定が出来ているわけではないから問題があるとやらで、その時の I 大使が幾つかの取決め (命日にはお花を捧げること、お酒を供えるなど) を残していったにも拘らず、そのことは継続されずに今に至っており、昭子さんは大いに嘆いている。私は最初はこういう配慮にいたく感心したが、なかなか問題はそう簡単にはいかないのだ。現在は毎年事件の起きた 2 月 25 日には昭子さんと近くのマスタートンに住む日本女性 Kuniko Pulglase がお参りするにとどまっている。

札幌ニュージーランド協会では創立 14 周年を記念して『シュリケン』の著者ビンセント・オー・サリバン教授を札幌に招待して講演会を開催することになった (97. 6)。船木会長は小樽商科大学を卒業後 NZ・ビクトリア大学に留学し、訳者であり当日の通訳を務めてくれた江澤氏は同時期に同大学院に学び、彼等は個人的にもサリバン教授の熱心な薫陶を受けたという因縁浅からぬ仲であった。小樽ニュージーランド協会も同教授の講演を例会として取上げてくれることになった。幸運なことに講演会に先立って筆者は北海道新聞にフェザーストン事件について書かせてもらうことになった (97. 5. 27)。「ニュージーランドの日本軍捕虜収容所と『Shuriken』—— 隠れた暴動の史実を劇化」として紹介された。両会場とも沢山の聴衆が参加して充実したものとなった。札幌ニュージーランド協会は勿論のこと小樽ニュージーランド協会も心を尽くした接待で遠来のお客様をもてなしてくれた。

1998 年 7、8 月筆者がカンタベリー大学の客員教授としてクライストチャーチに滞在していた時、ダニーデン入植 150 周年を記念して日本庭園を寄付するため、小樽市長が 72 人の使節団と共に姉妹都市ダニーデンを訪れ、筆者はそれに合流してダニーデンを訪れることになった。出発前 NZ のことを取材にきた北海道新聞の Y 記者がフェザーストン事件の遺骨問題に興味を持ち、フェザーストンまで Y 記者に同行することを筆者に依頼した。ダニーデンに少し滞在する予定であったので最初は渋ったが、結局一行がオークランドに発った時、我々はフェザーストンに向かった。フェザーストンの方ではこの問題はそっとしておいてほしいとの心境と聞いていたが、結局、戦争博物館を管理しているグレイグ氏が出迎えてくれ、記念碑と戦争博物館まで一日我々を案内してくれた。その上我々は町の人達に取材することも出来た。最後に Y 記者がいみじくも言っていたように本当に「良い取材」であった。その取材は 9 月に帰国すると、「ニュージーランド日本人捕虜射殺事件—— 慰霊碑建立なお遠く——」と大きく掲載されていた。(北海道新聞 '98 平和の風景 1998. 8. 16)

フェザーストンには桜井氏ら元捕虜たち 130 人でつくるニュージーランド会が設置した (1975) 「鎮魂」とニュージーランド人の親日貿易商ナイセ氏が寄贈した (1979) 「夏草やつわものどもが夢の跡」との二つの小さい記念碑がひっそりとあるだけだ。どちらも高さが低いので周囲の草が生い茂れば隠れて見えなくなってしまうだろう。もう少し大きい碑を建てたいというのが安達氏の悲願であり、歴代日本大使は懸命な努力を重ねてきたが、95 年 12 月フェザーストンを含むサウスワイララパ地区自治体の地区議会で僅差で否決された (日本兵に酷い目に会わされたオランダ

人の老兵と戦争のことを知らない NZ の若い女性が大反対しているとのこと)。地元の感情を考えれば、平和の塔とかその国の若者のための奨学金とかもっと有効な使途を考えるべきで、自分たちの仲間の慰霊碑を迷惑をかけたその国にどんと建てるのはその国民の神経を逆なでするのではないかとの意見もあった（実は NZ の少女と日本の少年が手をつないだ、それは可愛いレリーフができ上っていたということをフェザーストン選出のウォルカム議員は Y 記者と私に語ってくれた）。

(2)

この事件が次第に知られるようになり、近年学会で発表されるようになった。以下これまでに発表されたフェザーストン事件に関する研究を列記する。

講演、口頭発表

- 佐藤 幸子 「戯曲『シュリケン (*Shuriken*)』について—ニュージーランドの日本人捕虜のドラマ—」 北大英米文学講座 1992. 6. 24.
- 松尾 亮 「ニュージーランドに於ける日本軍捕虜の反乱」 関西ニュージーランド研究会 (現 NZ 学会) 1994. 9.
- 岩崎 恒雄 「フェザーストン事件を知っていますか」 日本ニュージーランド学会 1995. 6.
- 新屋 徳治 「ニュージーランドと私—フェザーストン収容所の思い出—」 JANTA (日本・オーストラリア・ニュージーランド教師連盟) 例会 1994. 5. 28.

論文、著書

- 新屋 徳治 『死の海より説教壇へ』 聖文社, 1988.
- 桜井 甚作 『地獄からの生還』 豆の木工房, 1993.
- 佐藤 幸子 「『シュリケン』をめぐる」 南半球評論 1991.
- 「*Shuriken* について」 小樽女子短期大学研究紀要 1992. 3.
- 「*Shuriken* におけるニュージーランド英語」 同上 1994. 3.
- 「ニュージーランドの日本軍捕虜収容所と『*Shuriken*』 — 隠れた暴動の史実を劇化 —」 北海道新聞 (夕) 1997. 5. 27.
- 「ニュージーランド日本人捕虜射殺事件 — 慰霊碑建立なお遠く —」 北海道新聞 ('98 平和の風景) 1998. 8. 16.
- 岩崎 恒雄 「Incident at Featherston — 日本側資料の紹介」 日本ニュージーランド学会誌 No. 2 1996. 6.
- 松尾 亮 「ニュージーランドに於ける日本軍捕虜の反乱 — 両者の捕虜観の相違 —」 名古屋外国語大学 紀要 11 号 1995. 1.
- 翻訳 『通訳さん』 (Keith Robertson: "*Interpreter*" 1970?)
- Mike Nicolaidi "*The Featherston Chronicles—A Legacy of War,*" Harper Collins, 1999.
- エイミー辻本 「消えた遺骨—ニュージーランド捕虜収容所異聞」 『丸』 9 月別冊 潮書房 1999. 9. 15.
- (協力 エリック・トンプソン—収容所通訳官)

ビデオ

“Shuriken — Prisoners of Culture” 1996.11. NZ で放映.

(3)

最新のフェザーストン事件についての情報は昨年（1999）出版された Mike Nicolaidi による “*The Featherston Chronicles*”（既出）である。

Regimental Sergeant Major Stuart Richardson は事件の数日後 ‘burial certificate’（埋葬許可証）が検視官のもとに返されたと書いている。そしてフェザーストンの Anzac Hall hospital で事件のつぎの日亡くなった Kawahara Susumu について ‘His body was returned to camp and included in the original 47 who were buried from this camp.’ (p. 151) とある。

通訳の見習士官 Keith Robertson (officer-cadet interpreter) はその手記（1970?）において生き残った捕虜は遺体を火葬にすることを望み、軍は埋葬することをのぞんだと書いている。そして ‘Where they buried them’ については、‘only God and Army headquarters know, for we were never told the whereabouts of their final resting place.’ (p. 151) と述べている。彼は戦前に Apostolic Church の牧師として日本にきており、捕虜達の信頼も厚かったようだ。

Army records (30 June 1953) には遺骨は送還された 800 人の捕虜と同じ船で (30 Dec. 1945) 日本に返されたと記録されている。しかし Robertson が捕虜を送還した時に横須賀まで同行したが、遺骨がその船で日本に返されたことについては知らない。

若いころフェザーストンキャンプで日本語を学んだジャーナリストの Russel Orr は *Dominion/Sunday Times* (5 June 1966) において遺骨は送還される捕虜と一緒に日本に返されたと述べた。事件の時の生き残りの護衛兵 Ken Martin と後日再び NZ を訪れた最初の捕虜である藤田保も同じ意見である（藤田保は 1974 年東京のニュージーランド大使館から遺骨は「間違いなく帰還兵と共に乗船」との回答をえている）。

スイス総領事 Schmid とその部下の Mr Ernst Dickenmann は、捕虜達がウエリントンから出発するのを見送ったが、遺骨が送還船で返されたことは知らないと Dickenmann（スイス在住）は彼への質問状の中で答えている（1991）。安達氏も 1993 年 NZ に来た時（10 Feb. マスタートン）インタビューを受けて、仲間の遺骨が日本に返されたということは全く知らないことで、このことについて始めて聞いたのは 1991 年であると述べている（p. 153）。

このたび入手した「消えた遺骨」（既出、エイミー辻本，1999）によると、事件後ただちに全員の遺体はトラックでウエリントンの陸軍本部へ移送され J・モリス JR 葬儀社で火葬され一体ずつ保管、陸軍関係者が引取りに来た（1945.10.16）という記録が最後であとは全く不明とのことである（この時事件の関係者だけでなく捕虜の病死者を含む 66 体が引き渡された）。

捕虜仲介国スイスから広島に原爆が投下（8月6日）して数日後捕虜の帰還に関する実務処理担当官 Junod 博士が来日したが、帰還兵と共に遺骨を乗船させたとの書類が軍当局に残されていると NZ 陸軍は彼に述べたとのことであるが、彼は帰還兵が日本に到着する前、12月早々に日本を去っている。

ただ遺骨が返されたのであれば、家族のもとに返されることは考えられないので東京千鳥ヶ淵の「無名戦士の墓」の南太平洋諸島の地区部分に納骨されているかもしれず、「消えた遺骨」の著者（辻本氏）は目下、厚生省に問いあわせたが、いまだに返答はないとある。

遺骨の行方についてはこのように様々な意見があり、今後の調査、研究が必要であろう。1998

年カンタベリー大学の客員教授として NZ に滞在した時様々な人の意見を聞いたが、マスコミの力を借りるのが有効な手段であろうとのアドバイスを戴いた。とりあえずダニーデンの Otago Daily Times の記者（市役所担当）と話し合い協力を要請した。今後どのようにして問題の核心に迫っていくかがこれからの課題である。

善良な NZ 人が、とんだことをしてしまったと狼狽して隠してしまった気持は良く分るが、関係者は次々この世を去っていつている今、もうそろそろ真相を明してくれてもいいのではないか、少しも危惧することはないのと思うばかりである。